



上林曉全集 十六

筑摩書房

增補  
改訂 上林曉全集第十六卷

昭和四十二年八月三十一日初版發行  
昭和五十五年五月十五日增補改訂版發行

著 者 上 林 曉

發行者 布川角左衛門

發 行 所 筑 摩 書 房

東京都千代田區神田小川町二ノ八

電話東京(294)七六五一(營業)

294 六七一一(編集)

振替 東京 六一四一二三

印刷 法令印刷株式會社  
製 本 矢嶋製本株式會社

© 1967, 1980 A. Kanbayashi

上林曉全集第十六卷目次

評論・感想

昭和六年——十三年

|                  |    |
|------------------|----|
| 昭和五年後半期の藝術派…………… | 三  |
| 十一谷義三郎論……………     | 六  |
| 一 聖者……………        | 六  |
| 二 海港詩人……………      | 七  |
| 三 凡人主義……………      | 七  |
| 四 外光派と「古い繪」…………… | 八  |
| 五 常識……………        | 一〇 |
| 六 希望……………        | 一〇 |
| アフオリズム以下……………    | 一一 |
| 父と私の文學……………      | 一二 |
| 藤澤清造氏の死その他……………  | 一二 |
| 藤澤清造氏の死……………     | 一三 |

|                     |    |
|---------------------|----|
| 嘉村礒多氏の「途上」……………     | 一四 |
| 山下三郎氏の「花」……………      | 一四 |
| 室生犀星氏の「ピアノの町」……………  | 一四 |
| 雑誌「四人」……………         | 一五 |
| 相良次郎氏譯「文學の連續性」…………… | 一五 |
| 文學者の生活……………         | 一六 |
| 福田清人論……………          | 一七 |
| 私の文學的計劃……………        | 一九 |
| 一 なんでもかんでも書きたい…………… | 一九 |
| 二 都會のことを書きたい……………   | 一九 |
| 三 清く美しい小説を書きたい…………… | 二〇 |
| 四 執筆生活について……………     | 二〇 |
| 藝術小説……………           | 二二 |
| 藝術的人格者……………         | 二三 |
| 「萬曆赤繪」を讀んで……………     | 二四 |
| 短篇小説について……………       | 二五 |

|                 |    |                   |    |
|-----------------|----|-------------------|----|
| トオマス・マンの言葉…………… | 二六 | 古谷綱武氏の「川端康成」…………… | 五二 |
| 俗流との闘ひ……………     | 三三 | 魯迅の遺言……………        | 五三 |
| 新人の足跡……………      | 三四 | 作家生活……………         | 五五 |
| プロ文壇……………       | 三四 | 志賀直哉小論……………       | 五六 |
| 新人群……………        | 三五 | 遺族の文章……………        | 五八 |
| 懸賞當選作家……………     | 三七 | 眠られぬ夜……………        | 六〇 |
| 女流作家……………       | 三七 | 一九三七年の小説界……………    | 六三 |
| 新人評論家……………      | 三七 | 文藝時評……………         | 六五 |
| ペンを祭る……………      | 三六 | 僕の文學開眼……………       | 六八 |
| スタンダールの傲岸……………  | 三九 | 柳緑花紅……………         | 七〇 |
| 歸郷作家の言葉……………    | 四一 |                   |    |
| 弱小作家……………       | 四三 | 昭和十四年——昭和十六年…………… |    |
| 田舎の感想……………      | 四四 | 外的世界と内的風景……………    | 七三 |
| 一作家の覺悟……………     | 四六 | 純粹への郷愁……………       | 七八 |
| 匹夫の志……………       | 四七 | わが評論の態度……………      | 八三 |
| 作家の心情……………      | 四九 | 天分と努力……………        | 八五 |

|                    |     |                  |     |
|--------------------|-----|------------------|-----|
| 私の内面的企劃……………       | 六九  | 文壇の新動向……………      | 一三五 |
| 文學俗化の問題……………       | 七二  | 文學と國策……………       | 一三六 |
| 文藝時評……………          | 七三  | 作家の社會的地位……………    | 一三七 |
| 時局と文學の二潮流……………     | 七五  | 歸還した戰爭作家……………    | 一三八 |
| 川端康成氏の人と藝について…………… | 一〇〇 | 新人の動き……………       | 一三八 |
| 上野博物館にて……………       | 一〇三 | 病氣と仕事……………       | 一二九 |
| 新ロマンチズムについて……………   | 一〇五 | 文藝時評……………        | 一三三 |
| 田舎生活への思慕……………      | 一〇八 | 藝術的理解と人間的理解…………… | 一三六 |
| トオマス・マンとハンス・       |     | 政治的關心について……………   | 一四三 |
| カロッサ……………          | 一〇八 | 現代文學と自然への郷愁…………… | 一四四 |
| 自己を語る……………         | 一一一 | 若き世代について……………    | 一四八 |
| 辛辣なる作家について……………    | 一一三 | 「風の中の子供」鑑賞……………  | 一五三 |
| 作家論の擡頭……………        | 一二四 | 新體制に面して……………     | 一五五 |
| ジイドと藤村の場合……………     | 一二六 | 作家の場合……………       | 一五七 |
| 新浪漫主義文學への要望……………   | 一二九 | 作家の感想……………       | 一五七 |
| 短篇小説論……………         | 一三三 | 「無茶苦茶な文章」……………   | 一五九 |

|                        |     |                  |     |
|------------------------|-----|------------------|-----|
| 節度ある文學……………            | 一六〇 | 私小説私観……………       | 一九八 |
| 詩人の境涯……………             | 一六三 | 文藝雜誌の統合……………     | 二〇〇 |
| 附、詩人の誇り……………           | 一六四 | 青春について……………      | 二〇三 |
| 文學の地盤としての日常性……………      | 一六五 | 農民氣質……………        | 二〇八 |
| 文藝時評……………              | 一六八 | 文學的忠言への感謝……………   | 二二一 |
| 歴史小説の勃興……………           | 一七五 |                  |     |
| 苦悶の喪失……………             | 一七八 | 昭和十七年——昭和二十年（四月） |     |
| 自己に即して……………            | 一八〇 | √故郷への回歸……………     | 二二七 |
| 文章時評……………              | 一八四 | 小説を書きながらの感想…………… | 二三三 |
| 1 モンテーニュの文章論に關聯して…………… | 一八四 | 私小説論議……………       | 二三九 |
| 2 感心した文章について……………      | 一八五 | 文學者の功罪……………      | 二四五 |
| 3 文章の説得力について……………      | 一八六 | 里見弴氏の作風……………     | 二四六 |
| 4 文章を拜むところ……………        | 一八九 | 文學と冒険……………       | 二四八 |
| 文學者の宿命……………            | 一九三 | 文學の振・不振の問題……………  | 二五三 |
| 葛西善藏……………              | 一九五 | 嘉村礒多……………        | 二五五 |
|                        |     | やつつけられた朝……………    | 二五九 |

|              |     |                 |     |
|--------------|-----|-----------------|-----|
| 文藝時評……………    | 二六三 | 純文學のために……………    | 三〇三 |
| 横光・川端……………   | 二六七 | 現實に即して……………     | 三〇七 |
| 伊藤整小論……………   | 二七一 | 作家と窮乏……………      | 三二三 |
| 文學者の本然……………  | 二七三 |                 |     |
| 藤村の信念……………   | 二七六 | 昭和二十一年——昭和二十六年  |     |
| 僕の文學的故郷…………… | 二七七 | 極靜の地獄……………      | 三二五 |
| 徳田秋聲氏の死…………… | 二七九 | 文藝時評……………       | 三三一 |
| 表現への執着……………  | 二八一 | 戦時中の文學論……………    | 三三一 |
| 私小説の新意義…………… | 二八四 | 永井荷風と志賀直哉……………  | 三四四 |
| 文學と處世……………   | 二八六 | 作品管見……………       | 三七七 |
| 僕の讀書……………    | 二九一 | わが文學の途……………     | 三三〇 |
| 戦時下の讀書……………  | 二九一 | 新文化の建設について…………… | 三三一 |
| 最近の讀書……………   | 二九三 | 人間則文學……………      | 三三三 |
| 僕の讀書法……………   | 二九四 | 島木健作「出發まで」…………… | 三三五 |
| 讀書餘録……………    | 二九七 | 大家論……………        | 三三七 |
| 東京に在りて……………  | 二九八 | 最近の文藝雜誌から……………  | 三四一 |

|                      |     |                |     |
|----------------------|-----|----------------|-----|
| 好きな作品・嫌ひな作品……………     | 三四四 | 文學的私事……………     | 三八〇 |
| 小説の面白さに就き……………       | 三四八 | 太宰治の死……………     | 三八三 |
| 野暮の文學……………           | 三五〇 | 創作餘話……………      | 三八四 |
| 私小説の運命……………          | 三五五 | 文藝時評……………      | 三八七 |
| 文學と修道院……………          | 三六一 | 新聞雜感……………      | 三八九 |
| 讀みにくい小説・讀みやすい小説…………… | 三六二 | 取巻風景……………      | 三九一 |
| 文學一家言……………           | 三六四 | 太宰君……………       | 三九三 |
| ジャアナリズムについて……………     | 三六七 | 私小説作法……………     | 三九五 |
| 或る青年雜誌の編輯者へ……………     | 三六七 | 短歌小感……………      | 四〇一 |
| 或る兒童雜誌の編輯者へ……………     | 三六九 | 私は誠實でありたい…………… | 四〇三 |
| 或る婦人雜誌の編輯者へ……………     | 三七〇 | 文藝閑談……………      | 四〇七 |
| 或る文藝雜誌の編輯者へ……………     | 三七三 | 文藝閑談……………      | 四一二 |
| 或る文化評論雜誌の編輯者へ……………   | 三七三 | ジイド斷想……………     | 四一七 |
| 田舎にて文學について……………      |     | 求める心の喪失……………   | 四一九 |
| 思うた事……………            | 三七六 | 私小説家の立場……………   | 四二二 |
|                      |     | 文藝誌今昔比較論……………  | 四二六 |

|                   |    |                 |    |
|-------------------|----|-----------------|----|
| 不滿と不信……………        | 四三 | 宿命と獨創……………      | 四九 |
| 作家の生死をめぐる……………    | 四三 | 文學修業……………       | 四三 |
| 昭和二十八年——昭和三十八年    |    | 「早稻田文學」の合本…………… | 四六 |
| 手前味噌……………         | 四三 | 短篇小説覺書……………     | 四六 |
| 茂吉の歌に寄せて……………     | 四三 | 私小説作品の受賞……………   | 四七 |
| ルーヴル展觀覽……………      | 四三 | ヘッセ・メモ……………     | 四七 |
| 川崎文學略解……………       | 四四 | 教科書に想ふ……………     | 四七 |
| 花袋作品の印象……………      | 四四 | 自作自解……………       | 四八 |
| 私小説を解明する……………     | 四四 | 「野」……………        | 四八 |
| 芥川管見……………         | 四四 | 「天草土産」……………     | 四八 |
| 太宰の死に憑かれてゐた私…………… | 四五 | 「薔薇盜人」……………     | 四八 |
| 萬世一系の私小説作家……………   | 四五 | 「二閑人交游圖」……………   | 四八 |
| 映畫化一度の感想……………     | 四五 | 「聖ヨハネ病院にて」…………… | 四八 |
| モデル……………          | 四五 | 「ちちははの記」……………   | 四九 |
| 連載未経験者の辯……………     | 四八 | 「春の坂」……………      | 四九 |
|                   |    | 「諷詠詩人」……………     | 四九 |

書

誌

.....

四  
九  
七

## 評論・感想



昭和六年——昭和十三年

## 昭和五年後半期の藝術派

——九、十、十一、十二月の主なる作品について——

藝術に於て、垢摺れのした袖口をのぞかせてゐる藝術は何等の力をもたない。ほんの少しでもいい、清酒な袖口をのぞかせてゐる藝術は、それだけで我々の注意を惹くに充分である。

藝術も過去の文化の集積である以上、從來のものと全然面目の變つたものであり得ることは出来ない。ただ少しばかり色合ひの異つた、或ひは洗濯の行きとどいた袖口をあらはしてゐれば、それで充分生新な相を呈するのである。たとへば谷川徹三氏が堀辰雄氏の「聖家族」を批評して「これはあらゆる古さをもちながら全く新しいものである」と言つてゐる如きは、その間の消息を傳ふるものである。あらゆる新しいものはあらゆる古さの上に立つてしかも新しい袖口を見せることを忘れないものである。

一九三〇年後半期の文壇に於て、所謂プロレタリア文學に於て、ともかくも問題になつたのは徳永直氏の「赤色スポート」一つであり、「改造」誌上に連月文藝時評の筆を

とつてゐた大森義太郎氏によつて、當然期待されてゐたプロレタリア文學の傑作の一つも宣揚されなかつた如きは、如何に所謂プロレタリア文學の不振であつたかを示すものである。即ちプロレタリア文學の新しい袖口はプロレタリア・イデオロギーであつた。文藝上のプロレタリア・イデオロギーは今の所垢摺れがしてしまつた。プロレタリア・イデオロギーに何か新しき袖口（表現、乃至社會狀況の變化に伴ふイデオロギーの進化）が発見されたとき、プロレタリア文學は再び新しき注意を惹くであらう。

是に反し所謂藝術派なるものは、横光利一氏の「機械」堀辰雄氏の「聖家族」などをはじめとして注目の的となつた作品が多かつた。所謂藝術派なるものは曾ての新感覺派の流れを汲み、所謂モダニズムとなりビルディングやアパートやダンスホールやバーなどを舞臺として目新しい袖口をひらひらさせてゐたが、「機械」や「聖家族」などに至つて再び新しい袖口を見せて來た。

藝術派の新しい袖口とは何であるか。モダニズムに疲れた人々、或ひは最初よりモダニズムに反感を持つてゐた人々によつて追求せられるところの精神的なものへの憧憬である。崇高なる精神、純潔なる愛、節度ある感傷、宗教的苦悶等々の如き、やや抽象的ではあるが、從來の享樂追求から離れてスキートなものへの追求がこれからなされるであらうことを私は信ずる。

横光利一氏の「機械」(「改造」九月號)の成功は、所謂藝術派の興隆の一頂點として祝福したい。大森義太郎氏の批評(「改造」十月號)、谷川徹三氏の批評(「新潮」十月號)、小林秀雄氏の批評(「文藝春秋」十一月號)、この三氏の批評を讀めば多角的に鑑賞し得るのであるが、若し藝術プロパー純粹文藝なるものがあるとすればその藝術プロパーを何程か暗示するものとして注目し價する。又技巧から言つてもその手際よさは、かかる所にも藝術があつたのかと、或る人々をして茫然自失せしめたであらう。「機械」の中の人物は皆、宗教下の苦業或ひは求道をしつつあるやうに私には思へる。ネームプレートをめぐつて、あらゆる人物が反撥し或ひは敵をゆるしてやむことのないのは、永遠にさとりを求めて倦むことのない修道者の道である。

堀辰雄氏の「聖家族」(「改造」十一月號)も亦藝術派の一つの標石として注目されたものであつた。感じ易い純真な青年の心の痛みが新しい姿をもつて我々の前にあらはれて来る。我々は近來快い感傷主義から見放されてゐた。感傷主義を噛み殺したプロレタリア文學、感傷主義を輕蔑的に蹴散らかしたブルジョワ自由主義、そんなもののために、ただ僅かに川端康成氏中村正常氏の作品を除いては、感傷主義は捨てられた。堀氏のこの作品は、傷ついた心——そんな古風な感情を新しく感じ直させる新感傷主義とでも言

ふべきものをもつてゐる。私は堀氏の作品の中では小品「風景」を最も傑作であると思つてゐたが、期待されてゐた才能が「聖家族」に至つて充分に發揮されたものと思ふ。廣津和郎氏が「中央公論」十二月號の文藝時評において、初期の豊島與志雄氏の第一期藝術味を引き合ひに出して、「聖家族」の作者の藝術味を論じてゐるのは面白かつた。確かに初期の豊島氏の細かな幻想は、今で言へば堀辰雄氏に相當するものであつたに違ひない。——併し、廣津氏の最後の結論には賛成することが出来なかつた。

「我々が恐れることは、若しか何かの方法でその霧を追つ拂つてしまつて、これの正體を、白日の下に照し出して見たら、それが恐らく甚だ幼稚な唯の甘い物語になつてしまふだらうといふことだ」と言ふ。なんで「霧を追つ拂つてしまふ」必要があらう。この霧をもつた、心理の飄々さこそ堀氏の新しさである。この霧を剥いでしまつたなら、堀氏存在の意義はない。戀をする人物は、なるほど坊つちやん然たる青年と世間知らずのお嬢さんであるが、彼等の心理の探究者としての堀氏は、決して「甘い物語」作家でもなければ、探究されたる心理も決していい加減なものではない。心理解剖の深い修練がある。心理の細かく捲くれ捲くれあがつて来るものが、霧のやうになつて全面を被ふのである。

深田久彌氏の「オロツコの娘」(「文藝春秋」十月號)は、

未開民族の純潔なる愛を取り扱つて、「蟹工船」「セムガ」以來擲取被擲取の舞臺としての名高くなつた北方オホツク海方面に一つの藝術派の旗を立てたものである。この作品には、「三つの誠」「公孫樹の下の信者」「美の意味」等の如く、表面にあらはれた觀念的なものはないけれど、明に純潔なるものを追求する觀念を看取することが出来る。美、誠、藝術、純潔、人間が持つ美徳的なものへの憧憬者として、深田氏の存在は奥床しい。

川端康成氏は「淺草赤帶會」「新潮」九月號、「淺草紅團」「改造」九月號の二作によつて、朝日新聞に連載した「淺草紅團」以後の精進振りを示した。去年の冬になる頃、生身とした裸の脚をして踊る踊子達の物語を讀んだ人たちは、今年も丁度今冬になる頃、あの物語を思ひ出してゐるにちがひない。私は將來夏には「淺草紅團」のことを忘れてゐることがあらうとも、冬になれば必ず思ひ出すにちがひない。

徳田秋聲氏の「老苦」(「文藝春秋」九月號)は、一面に於て、私の興味を惹いた。齡六十に近い老作家が、重患の病兒を抱へ、或る時はダンスの會に交り、或る時は朝のおみおつけを拵らへると聞いたなら、誰でも驚くにちがひない。「老苦」一篇は、若者のやうな近代生活と、老婆のやうな窮迫生活の染め分けから成る、傑れたる身邊小説である。如何なる老作家が、かかる赤裸な自分の生活を描いたか。

白眼か知つたか振りか、趣味か隠遁か、多くの老作家が落ち込んで行く陷穽から見事に脱出して、「生活」に餘念のない老作家徳田秋聲！

淺原六朗、久野豊彦氏、龍膽寺雄氏の合作なる「九三年」は、今年後半期の藝術派の文學を論ずるためには見逃してはならぬものであらう。この試みに對しては多くの批評(多くは惡評)が出た。それに引きつゝいて、共同制作の問題が喧しく論ぜられた。だが小林秀雄氏の簡單なる斷案が最も明快である——「合作はプロレタリア運動に貢獻する事によつてのみ正當なのである」(「文藝春秋」十二月號)。ここで、私は、共同制作について一言辯すべきであるかも知れない。併し私の趣味は、最早これに觸れることを好まない。共同制作が喧しくなれば共同制作について、暴露小説が喧しくなれば暴露小説について、形式文學が喧しくなれば形式文學について、凡庸な作家評論家までこれに参加し、一言無かるべからずと言つた態度で凡庸な批評を口になすのを聞くのは、私の趣味に合はない。いいか悪いか、正しいか正しくないか、その大體の趨向が判れば私には十分である。それ以上は無用の言である。如何に多くの人々が無用の言を費したことが。

石濱金作氏の「没落者」(「文藝春秋」十二月號)は、今年の歳末に、誰人もの注意を惹いたにちがひない。妻を愛し得ぬ夫、夫を愛せずには居られない妻、この矛盾から来る